

『飛鳥西部の後期・終末期古墳を巡る』

担当:井守 徳弘

●予定コース

近鉄学園前＝西大寺駅＝橿原神宮前駅＝飛鳥駅－岩屋山古墳－
許世都比古命神社－牽牛子塚古墳－越塚御門古墳－真弓鐘子塚古墳－
益田岩船－牟佐坐神社－孝元天皇輕境原宮跡石標－見瀬丸山古墳－
植山古墳(望見)－春日神社・応神天皇輕嶋豐明宮跡－法輪寺・輕寺跡－
孝元天皇陵－本名寺・石川精舎跡－厩坂寺跡－橿原神宮前駅＝西大寺駅＝
近鉄学園前 (解散:5時ごろ・徒歩距離 約8km)

●古墳時代

一般的には、古墳時代は3世紀半ば過ぎから7世紀末頃までの約400年間を指すことが多い。中でも3世紀半ば過ぎから6世紀末までは、前方後円墳が北は東北地方から南は九州地方の南部まで造り続けられた時代であり、前方後円墳の時代と呼ばれることがある。

前方後円墳が造られなくなった7世紀に入っても、方墳・円墳、八角墳などが造り続けられるが、この期を古墳時代終末期と呼ばれている。

古墳時代は前期、中期、後期、終末期と分けられる。

・弥生時代後期(2世紀～3世紀前葉)

楯築墳丘墓(岡山)・西谷3号墓(島根)

この時期は墳丘墓といい、古墳とは呼ばない。

・古墳時代発生期(3世紀初めから、3世紀前期)

ホケノ山古墳(奈良)・纏向石塚古墳(奈良)

・古墳時代前期(3世紀後期から、4世紀後期)

箸墓古墳(奈良)・椿井大塚古墳(京都)・メスリ山古墳(奈良)

渋谷向山古墳(奈良・伝景行陵)・巢山古墳(奈良)

造山古墳(岡山)・津堂城山古墳(大阪)

・古墳時代中期(4世紀末から、5世紀後期)

新木山古墳(奈良)・ウワナベ古墳(奈良)・コナベ古墳(奈良)

誉田御廟山古墳(大阪・伝応神陵)・大仙古墳(大阪・伝仁徳陵)

作山古墳(岡山)・西都原古墳群(宮崎)

・古墳時代後期(6世紀前期～6世紀後期)

見瀬丸山古墳(奈良)・今城塚古墳(大阪)・河内大塚山古墳(大阪)

・古墳時代終末期(6世紀末～7世紀後期)

高松塚古墳(奈良)・牽牛子古墳(奈良)・石舞台古墳(奈良)

大堤権現塚古墳(千葉)・春日向山古墳(大阪)

●岩屋山古墳(古墳時代終末期・7世紀前期頃)

明治時代にイギリス人のウィリアム・ゴードンが来村し、岩屋山古墳の石室を調査して「舌を巻くほど見事な仕上げと石を完璧に組み合わせてある点で日本中のどれ一つとして及ばない」と『日本のドルメンと埋葬墳』の中で紹介しています。

ウィリアム・ゴードンは明治政府がイギリスより大阪造幣寮(現造幣局)に招聘した化学兼冶金技師です。日本の古墳研究の先駆者としても名高く、日本考古学の父と呼ばれている。さらに、日本アルプスの命名者としても知られています。

岩屋山古墳は昭和53年に史跡環境整備事業に伴う発掘調査が橿原考古学研究所によって実施されました。

墳丘は一辺約40m、高さ約12mの2段築成の方墳で墳丘は反築で築かれており、下段テラス面には礫敷きが施されていることが明らかとなりました。

埋葬施設は石英閃緑岩(通称飛鳥石)の切石を用いた南に開口する両袖式の横穴式石室です。

規模は全長17.78m、玄室長4.86m、幅約1.8m、高さ約3mで羨道長約13m、幅約2m、高さ約2mを測る。

壁面構成は玄室が2石積みで奥壁上下各1石、側面上段各2石、下段各3石で羨道部分は玄門側が1石積みで羨門側が2石積みとなっています。

天井石については玄室1石、羨道5石で構成されています。

石室内からは土師器・須恵器・瓦器・陶磁器・古銭等が出土しており、築造年代については7世紀前期頃と考えられています。

被葬者については斉明4年(658)に没した巨勢徳陀古はどうか。

徳陀古は乙巳の変(645)で武功を立て正三位左大臣に上り詰めた。

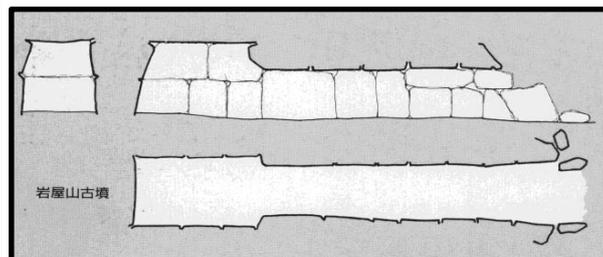
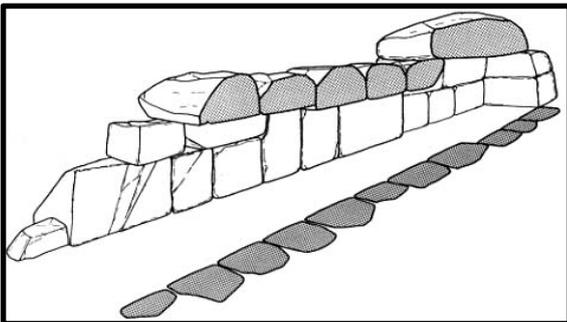
巨勢氏の祖である巨勢小柄が近くの許世都比古命神社に祀られており、宇地名である越は巨勢によるものと考えられる。

巨勢氏は孝元天皇から派生する氏族の中で、武内宿禰の子である巨勢小柄宿禰を祖とし、葛城氏の衰退と入れ替わるように大和盆地南部に勢力を拡充させています。6世紀のはじめ、第25代・武烈天皇は世継ぎに恵まれず、血統断絶の危機を迎え、北陸地方にいたとされる継体天皇が擁立されることとなります。その擁立を強力に押し進めた人物のひとりが巨勢男人であり、第26代・継体天皇の即位を契機に巨勢氏の権勢は大きくなり、絶頂期を迎えます。

または、吉備姫王(きびのおおきみ)が候補として挙げられます。

吉備姫王は桜井皇子(欽明天皇の皇子)の娘。茅渟王(押坂彦人大兄皇子の子)の妃となり、宝皇女(皇極=斉明天皇)・軽皇子(幸徳天皇)を儲けた。

皇極2年(643)に没した。



●許世都比古命神社

『延喜式』神明帳搭載の式内社に比定されます。

祭神は許世都比古命(巨勢小柄)。武内宿禰の第5子で巨勢氏の祖であり、五郎(老)神とも俗称されています。

ただし、『古事記』には武内宿禰の第2子となっており、『三代実録』(平安時代の歴史書、901年完成)では5男、群書類聚(江戸時代)では7男など諸説あります。

巨瀬氏の子孫たち(巨勢徳陀古等か)がお祭りしたのでしょう。

武内宿禰は景行・成務・仲哀・応神・仁徳天皇の5代の天皇に棟梁之臣・大臣として仕え、国政を補佐したとされる伝説的人物。

紀・巨勢・平群・葛城・蘇我氏などの中央諸豪族の祖とされる、

年齢は280歳から360歳まで諸説ありますが、長寿で永年勤続した人です。

●牽牛子塚古墳(古墳時代終末期・7世紀後期頃)

大正元年・大正3年(この時臼歯など出土)・昭和52年には環境整備事業の一環として発掘調査が実施されていました。

平成21年から平成22年にかけての発掘調査によって、八角墳(八角形墳)であることが判明し、飛鳥時代の女帝で天智天皇と天武天皇の母とされる斉明天皇と娘の間人皇女合葬の可能性がたかまった。

さらにすぐ南側に平成23年12月に発掘された越塚御門古墳に孫娘の太田皇女と思われる古墳も見つかり発掘された。

墳丘は地震により崩落していたが、高さ約4.5mと推定され、版築による三段築成の八角墳であることが判明し、墳丘の裾は平面八角形状に削られており、対辺の長さは約22mにおよぶことを確認した。

墳丘周囲では外側を八角形にかこむ石敷遺構が確認されており、北西の裾からは三辺分の石敷を検出している。

内部施設は、南に向けて横穴が開くかたちの横口式石槨であり、2009年段階ではすでに一部露出していた。横口式石槨は、約80トンの重量をもつ1個の巨大な凝灰角礫岩をくりぬいて、約70トンの埋葬施設をつくったもので、巨石は約15km離れた二上山西麓より運搬したものと考えられています。

石槨の幅は5m、奥行き3.5m、高さ2.5mの規模を有し、石槨内は中央部に幅44.7cm、長さ152.5cmの仕切り壁によって東西2つの空間に仕切られた合葬墳であることが判明した。

床面は長さ約1.95m、幅約80cmの棺台が削り出されています。

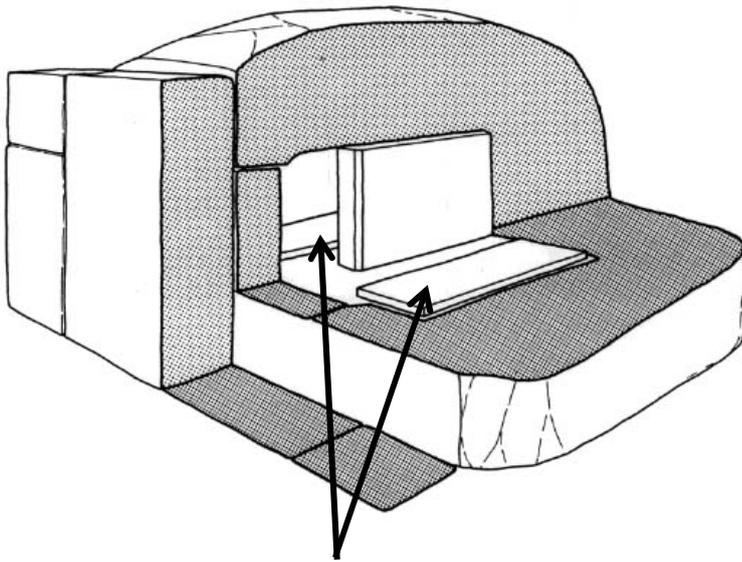
閉塞石については内扉と外扉の2石からなり、内側は凝灰岩製で高さ約1.12m、厚さ約62cm、幅1.47mを測る。

外扉については安山岩系の石材を用いており、幅2.69m、厚さ約63cm、高さ2.4mあり、現地で斜めに倒れた状態で残っていた。

鬼の俎、鬼の雪隠・益田岩船、そして牽牛子古墳は刳り貫き式石槨である。亀甲形座金具、八花文座金具、六花文環座金具、円形座金具、綾隅金具)、また鉄製の鍔(カスガイ)、鉄製の釘、ガラス玉などの玉類、臼歯などの遺物が出土している。

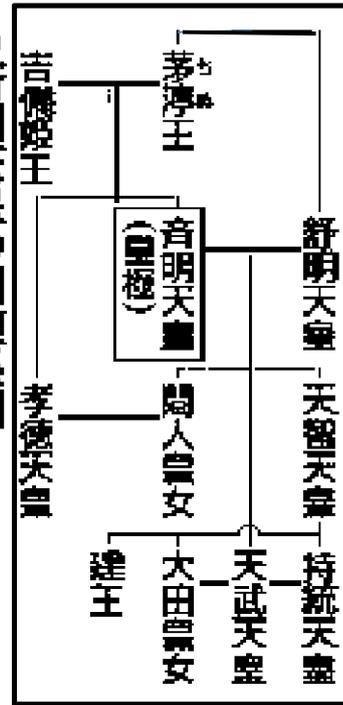
夾紵棺とは麻布を漆で36枚に塗り重ねてつくった当時としては最高級の棺でした。

横口式石槨

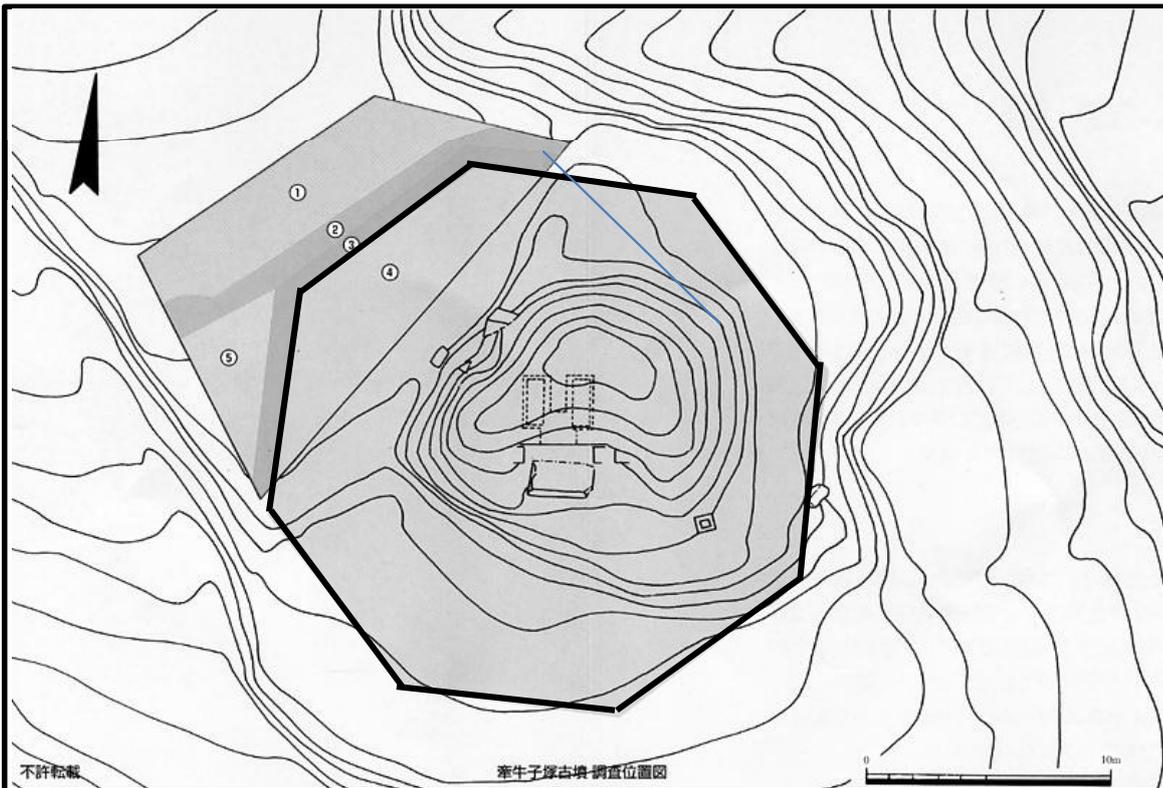


2つの棺台

◎ 斉明天皇の関連系図



八角形墳であることが判明した。



●越塚御門古墳(古墳時代終末期・7世紀後期頃)

墳丘は、地表面には痕跡が残っておらず現時点では墳形や規模は不明です。しかし、埋葬施設の周囲の状況から墳丘は版築で築かれていたことがわかります。

埋葬施設は貝吹山周辺(高取町与楽)で採れる石英閃緑岩を使用した南に開口する刳り貫き式横口式石槨です。埋葬施設は天井部と床石の二石からなる構造となっています。

規模は内法長約2.4m、幅約90cm、高さ約60cmを測ります。床面には幅約2cmの溝をコの字形に設けています。

天井部の大半は石取り等で失われており不明ですが、奥壁付近が残存しており、ドーム状を呈していたことがわかります。

側石の底と床石の接する箇所には窪みがあり、石材を接合する際のはぞ穴と考えられます。石槨の前面部には長さ4m以上、幅約1mの墓道が設けられています。

墓道は人頭大の川原石を側石として数石積み上げ、その間をバラスで敷き詰めています。

出土遺物は漆膜片、鉄製品などが少量出土していますが、他に古墳に関わる遺物はありません。



平成22年12月12日の
現地説明会写真



(東から)

●真弓鐘子塚古墳(古墳時代後期・6世紀後期頃)

現在は石室内部が崩落の危険性があるとのことで石室内には入れません。直径約23m、高さ約5mの円墳です。

埋葬施設は花崗岩の巨石を使用した横穴式石室で全長10m以上です。

昭和37年に実測調査が行われ、石室規模は玄室長6.33m、幅4.23m、高さ4.8m、で北側の羨道は幅1.92m、高さ2.35m、長さ3.9m、南側の羨道は幅2.26m、高さ2.28m、長さ現長で約5mあることが明らかとなりました。玄室を中央に、その南北に羨道を持つ形態は珍しい。

石室の壁面構成は巨石を6～7段積み上げ、3段目以降は急激なもち送り(穹窿式)となっており、天井石は巨石3石を架橋しています。

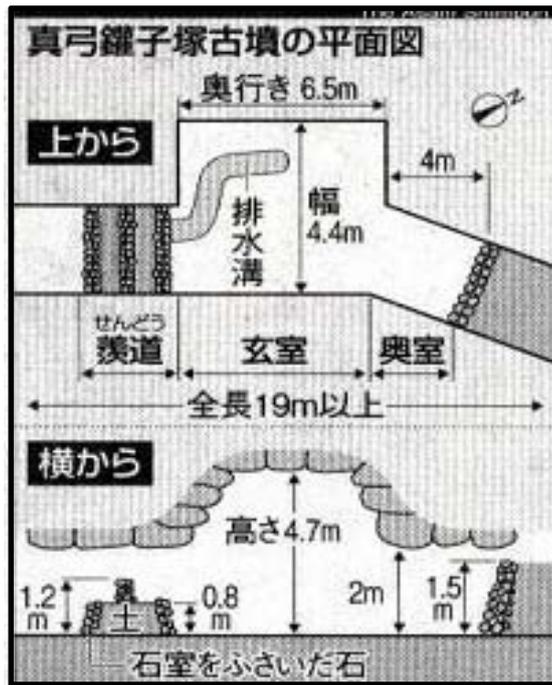
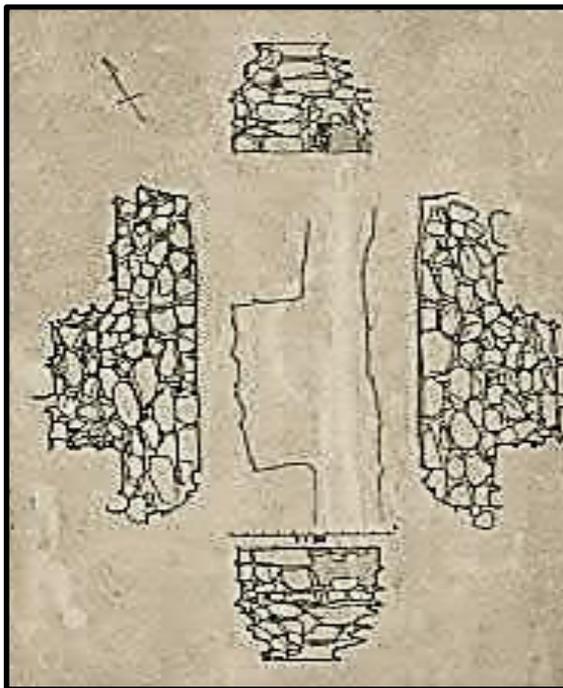
石室内からは金銅製装飾金具や金銅製馬具(尾錠)、須恵器や凝灰岩片も多数出土していることから石棺が安置されていたと考えられています。

渡来系氏族の墳墓の副葬品に多いミニチュア土器も出土しています。

築造年代については石室構造や出土遺物などから6世紀後半頃と推定されています。

京都橋大学の猪熊教授は蘇我稲目(570没)ではないかと推定されています。「蘇我稲目は百済の2人の姫を妻に迎えたという『日本書紀』記述から追葬されたのはこの2人で石舞台古墳より古くて規模も大きいし石舞台古墳の馬子(626没)の父であっても不思議ではない」としています。

なお鐘子とは弦(つる)のある青銅製・真鍮(しんちゆう)製の湯釜のこと。



棺は確定はされていないが明日香村教育委員会の調査結果によると石室の西側と奥室の床から家型石棺の破片が出土しており石材から二上山凝灰岩製の石棺が2棺(奥室と袖の所)あったと思われる他、吉野川流域の緑泥片岩の破片も見つかっており組合式石棺も1棺あったと思われる。他にも出土した鉄釘から木棺が1棺以上があった可能性がある。(古墳は6世紀中期頃に築造されているが6世紀後期までに数回追葬された痕跡が閉塞石の痕跡から判明している。

●益田岩船

花崗岩の巨大な石造物。

益田池の石碑説・占星(天文)台説・ゾロアスター教の拝火壇説などがありますが古墳の横口式石槨説が正しいようです。

横口式石槨の建造途中で石にひびが入ったことが分かり放棄された。

牽牛子塚古墳の石室とそっくりである。

東側の穴と違って、西側の穴には水がたまらないことから、亀裂が入っているのでしょう。

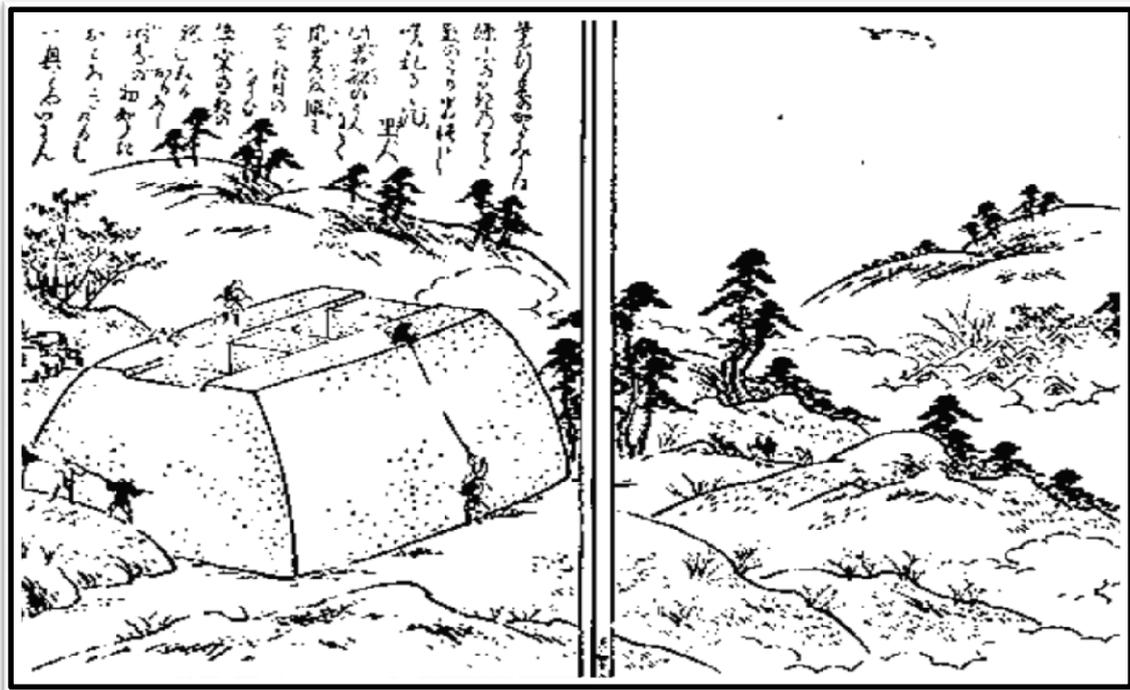
形状は東西約11m、南北約8m、高さ約4.7m(北側)の台形状で、東西の側面はほぼ垂直に切り立っている。上部から側面にかけて幅1.6mの溝が東西に掘られている。この溝に1辺1.6m、深さ1.3mメの方形の穴が、1.4m間隔を開けて二つくり抜かれている。

江戸時代から知られており『大和名所圖會』にも、少し誇張されたスケールで描かれている。

圖會と比べてみると、岩船周囲の景色がだいぶちがっている。

圖會では台形の形がきれいに描かれているが、現在の巨石は山の斜面に沿って西南側が半分くらい土に埋もれているようです。

石の種類は花崗岩(石英閃緑岩)で、重量は考古学者 森浩一氏は約800トンと推定しているが約160トンと推測されている。



『大和名所圖會』の益田岩船

益田岩船の登り口付近に、明治から大正時代にかけての石切場跡があった。益田岩船の石材は現地に露出していた石を現地で加工したもので、持ち上げて運んだものではないそうである。

それにしてもどうして運ぼうとしたのでしょうか。

●沼山古墳（古墳時代後期・6世紀後期頃）

昭和57年(1982)に公園整備に伴う発掘調査が実施されました。径18m、高さ5.5mの円墳で、墳丘の中央に片袖の横穴式石室が南側に開口しています。

石室の規模は、玄室が長さ4.95m、幅2.95m、高さ4.25mで、これに、長さ4.5m、幅1.8m、高さ1.8mの片袖の羨道がとりつきます。

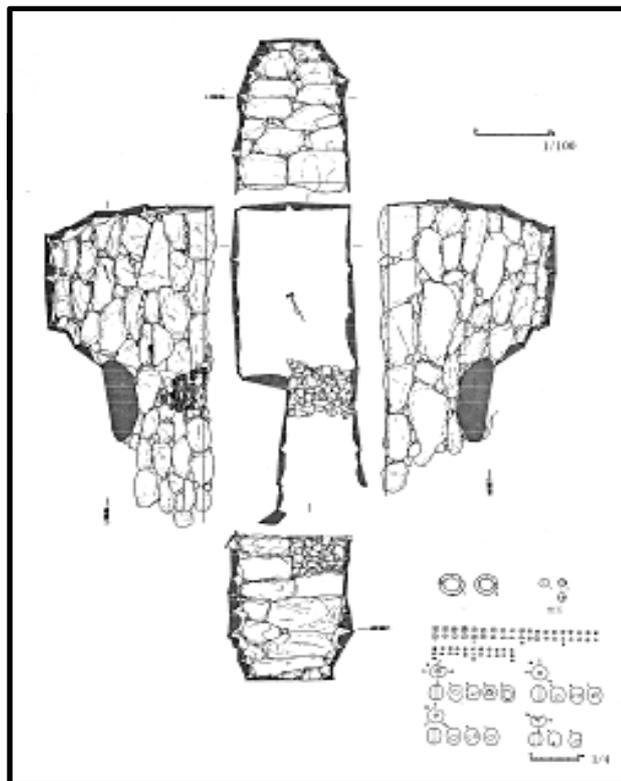
花崗岩の自然石を積み、玄室内は高さ2mまで垂直に積み、それから上は四壁をもち送り(穹窿式)に積み上げています。天井は2枚の石で覆っています。玄門部は閉塞石が残っていたようです。

玄室内からは、銀製空玉・ガラス製小玉・トンボ玉・金環などの装身具が出土。心葉形杏葉・辻金具・絞具・革帯金具・鞍金具などの馬具、鉄鏃・鍔(かすがい)・釘などの鉄製品、須恵器・土師器などの土器も出土しています。

とくに玄室中央から、甕(かめ)・甑(こしき)・竈(かまど)のミニチュア炊飯具のセットが出土しています。

出土した土器から6世紀後期に築かれた古墳と推定されます。

本古墳は渡来人の人々が住んだ身狭(むさ、見瀬)に位置し、渡来系の東漢(やまとのあや)の定住していたとされる檜前(ひのくま)地域に隣接しているなど、真弓罐子塚古墳、乾城古墳(高取町与楽)、与楽罐子塚古墳などと同様に、玄室平面が正方形に近く、天井がドーム型に石積みされた古墳であることから、これらの人々の墓と思われます。(檀原教育委員会)



●式内社・牟佐坐神社

神社の由緒によると、「祭神は高皇産霊(たかみむすび)命と孝元天皇。日本書紀天武天皇紀は安康天皇の御代牟佐村(現見瀬町)村主 青の経営であった。

当時の祭神は生雷神(即ち雷公)であり江戸初期まで榊原(境原)天神と称されていた。

享保の頃に菅原道真公を祭神としたが明治に至り古道再び明らかにと天津神である高皇産霊命を奉祀して今日に至る。

境内は孝元天皇の即位された宮地と伝えられている」とある。

『日本書紀』天武天皇元年(672)7月の条に壬申の乱の戦闘中、高市軍の大領の高市県主許梅(しこめ)の神懸りになって言うに「吾は身狭社(むさのやしろ)に居る生霊神(いくたまのかみ)である、神武天)の陵(みささぎ)に馬や種々の武器を奉れ、吾は皇御孫命(みまのみこと、天照大神)の前後に立ちて、不破に送り奉るがよい。今もまた官軍の中に立って護ってい」とあり、そのようにし、高市・身狭二社の神をお祀りした」とある。

『日本書紀』雄略天皇2年(458)の条に「天下の人々は大変悪い天皇だとそしたが、牟佐の村主青と檜隈(ひのくま)の民使博徳(たみのつかいはかところ)だけが可愛がられた」とある。

また、雄略天皇8年(464)の条には、この2人が呉国に派遣されている。

呉国とは『日本書紀』では、5世紀後半の中国の南北朝対立の時期においては、南朝(宋)の方を呉国と表現しています。

当社の禰宜の宮道君述が室町初期の文安3年(1446)に書いた『五郡神社記』には、牟佐神社は牟佐村築田にあり、祭神は生雷神で、旧記によると安康天皇(453～456)の代牟佐の村主青によって創祀されたと記しており、当社由緒にも記されているが『日本書紀』安康天皇紀には記載されていない。

『三代実録』の貞観元年(859)正月27日に従五位下から従五位上に進められている。

『延喜式』神名帳では式内大社として登載され、月次(つきなみ)・新嘗・祈年三祭には案上官幣に預かる由緒ある古社であった。

しかし『大和志』に今榊原天神と呼ぶとあるように、享保21年(1736)『大和志』編集当時には古の祭神や所伝を失って時流に追従し、菅原道真を祭る天神社と呼ばれるようになって衰退したようである。

祭神の高皇産霊(たかみむすび)命は『古事記』によれば、天地開闢のとき、最初に天御中主神が現れ、その次に神皇産霊神(かみむすび)と共に高天原に出現したとされるのが高皇産霊という神です。

孝元天皇の宮跡は、近鉄岡寺駅東側に孝元天皇軽境原宮跡石標があり、そこで述べます。

●孝元天皇軽境原宮跡石標

孝元天皇(孝霊天皇18年・紀元前273年～孝元天皇57年・紀元前158年)は『古事記』『日本書紀』に記されている第8代の天皇です。

(第2代綏靖天皇から第9代開花天皇まで)の一人で、実在しない天皇と捉える見方が一般的であるが実在説もあります。

欠史八代とは系譜(帝紀)は存在するもののその事績(旧辞)が記されていない8人の天皇のことをいいます。

皇后は麩色謎命(うつしこめのみこと)でお子さんが、四道将軍の一人である大彦命(おおひこのみこと)・少彦男心命(すくなおこころのみこと)・開化天皇・卑弥呼とされる倭迹迹姫命(やまとととひめのみこと)を生んでいる。

この地域一帯が軽と呼ばれていたようである。見瀬丸山古墳の北にいまでも大軽町の地名が残っている。

孝元天皇の都が軽の境原宮に移されたと『日本書紀』に記されている。

江戸時代の国学者である本居宣長の吉野山への旅行を記した『菅笠日記』の中にもこの辺りのことを歩いた記述があります。

●見瀬丸山古墳 宮内庁畝傍陵墓参考地(古墳時代後期・6世紀後期)

6世紀後期に築造されたと推定された前方後円墳です。

被葬者は欽明天皇と堅塩媛の陵墓であるとの説が有力視されています。

全長は318m、前方部高さ15m、幅210m、後円部の径155m、高さ21mで、奈良県下最大で、日本全国においても6位に位置し、古墳時代後期後半に築造されたものの中では最大の規模を誇っています。

ちなみに、古墳のベスト10は、

1位	仁徳陵古墳(大仙古墳)	486m
2位	誉田御廟山(伝応神陵)	425m
3位	履中陵古墳(石津ヶ丘古墳)	365m
4位	造山古墳	350m
5位	河内大塚古墳	330m
6位	見瀬丸山古墳	318m
7位	渋谷向山古墳(景行天皇陵)	289m
8位	土師ニサンザイ古墳	288m
9位	仲ツ山古墳	286m
10位	箸墓古墳	280m

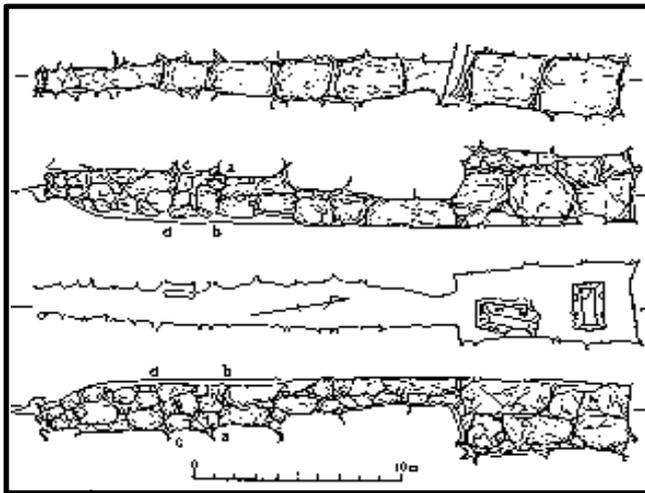
横穴式石室の全長は28.4mで、全国第1位の規模である。

羨道は一枚の長さ4.8mの巨大な自然石6枚で天井を覆い、長さ20.1m、幅1m以上、高さ1.5mほど。

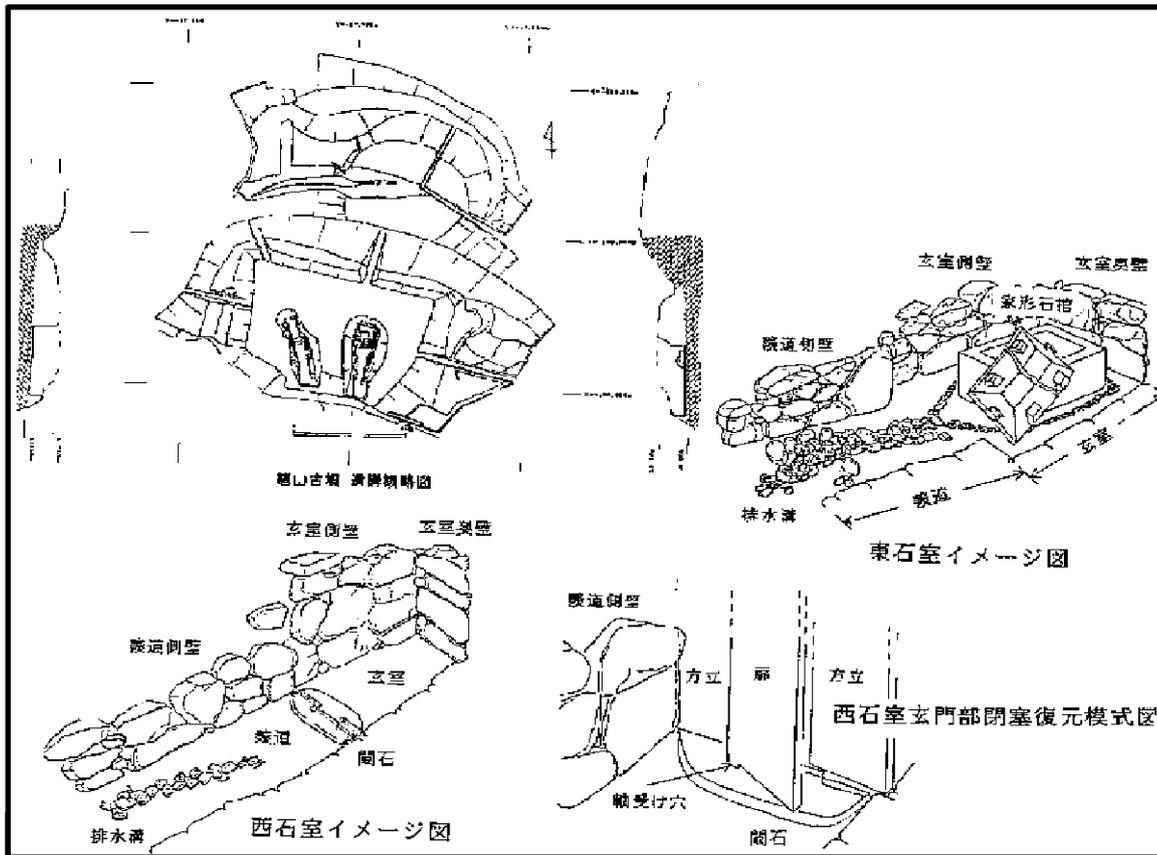
玄室の長さ8.3m、最大幅4.1m、高さ4.5mで、二つの刳抜式家形石棺がL字型に置かれている。玄室内には約1mの土砂が堆積しており、石棺の身については詳細は不明だが、奥棺は蓋の長さが2.42m、幅1.44m、高さ0.42m。前棺は蓋の長さが2.75m、幅1.41m、高さ0.63mとすこし大きい。材質は流紋岩質溶結凝灰岩で竜山石です。



左下が見瀬丸山古墳。右上は石室および石棺の詳細。
 左上は孝元天皇陵。
 江戸時代には天武・持統天皇の合葬陵と考えられていた。
 玄室4間半と羨道14間半で、計19間となり(江戸時代の1間≒1.9536m)、
 37m余となり、計測は少し大きい。天井石が玄室3石、羨道6石は合っている。



●植山古墳（東石室 古墳時代後期・6世紀末頃）
（西石室 古墳時代終末期・7世紀前期頃）



現在公園整備中で墳丘途中で柵が張られて入れません。
 巨大な横穴式石室が2基ある双室墳ですが左が西石室で推古天皇、右が東石室が推古天皇の子の竹田皇子と推定されている。
 東西約40m、南北現存約27m、墳丘高約3～6mの長方形墳。
 東石室はほぼ南に開口する両袖式石室で、全長約13m、玄室長6.5m、玄室幅3m、羨道長6.5m、羨道幅1.9mを測る。
 石室内には熊本県宇土半島産出の阿蘇溶結凝灰岩(阿蘇ピンク石)で造られた刳抜式家形石棺が完存しています。
 西石室は南南東に開口する両袖式石室で、全長約13m、玄室長5.2m、玄室幅2.5m、羨道長7.8m、羨道幅2mを測ります。
 玄門部に竜山石で造られた玄室と羨道を間仕切る閘(しきい)石が置かれています。

竹田皇子が死亡した6世紀末頃に造営され、628年に死亡した推古天皇を合葬した。7世紀中頃、大阪府河内郡太子町にある古墳時代末期の古墳の山田高塚古墳に改葬されたと考えられています。

2001年に植山古墳を囲む柵列跡が見つかりました。これは全国でも例のないものです。高さ2mぐらいの墓域を囲む目隠しではないかと考えられています。

●軽寺跡(法輪寺)

法輪寺本堂下にある土壇が金堂跡と推定されています。寺域からは飛鳥時代後期から白鳳時代前期にかけての古瓦が出土しています。また、飛鳥時代中頃の柱跡が東西に伸びているのが確認されており、寺域の北限の塀と考えられています。丘陵状の地形から伽藍配置は、塔・金堂・講堂が南北に一直線に並ぶ山田式配置だと考えられています。

案内板によると創建者は、賀留大臣玄理(くろまる)で、推古天皇の時、唐より持ち帰った薬師如来を本尊として、軽寺を建てたと説明しています。賀留大臣玄理が誰を指すのかは不明です。高向玄理とする説があるようです。

『日本書紀』天武天皇朱鳥元年(686)に軽寺という記述があって寺の存在がわかると案内板にある。

天武15年(686)の5月24日頃から天武天皇の病が重くなった。

そして7月20日に朱鳥元年と改元された。

こうした中で8月21日主だった寺に寄進をされた。この中に軽寺の記述がある。

しかし、9月9日に天武天皇は病ついに癒えず崩御された。

さらに案内板に、平安時代中期に関白藤原道長が吉野詣でのとき、この寺を宿としている。当時付近には久米寺、大窪寺などの大寺があるにも関わらずこの寺を宿としたのであるから、当時は相当な規模をもって栄えていたと思われるとある。

高向玄理は飛鳥時代の遣隋留学生。帰国後、大化改新政権の政治顧問。

推古天皇16年(608)遣隋使小野妹子に従って隋に33年間留学した。

帰国後、大化改新政権において、僧旻(みん)とともに国政最高顧問である国博士に任ぜられ、改新政治のブレーンとして活躍した

大化2年(646)には新羅に、白雉5年(654)には唐に派遣され、外交面においても重要な役割を果たしたが、同年唐の都長安で客死した人である。

●春日神社 第15代・応神天皇の伝軽嶋豊明宮跡

第15代・応神天皇の宮は『日本書紀』では軽嶋豊明宮(かるしまのとよあきらのみや)。『古事記』には、軽嶋之明宮と見える。さらに、『日本書紀』には難波にも大隅宮(おおすみのみや。現在の大阪市東淀川区大隅か)が置かれたと記述されています。

『日本書紀』には応神41年(310)ここ、明宮(あきらのみや)で111歳で崩御されたとの記述があります。『古事記』は130歳です。

陵墓は『古事記』に川内の恵賀(えが)の裳伏(もふし)岡にありとしている。

『日本書紀』雄略紀には蓬藁丘(いちびこのおか)の誉田陵と見える。

蓬藁(いちびこ)とはイチゴのこのことのようにです。

第15代・応神天皇は神功皇后の三韓征伐の帰途に宇瀨(うみ、福岡県糟屋郡宇美町)で生まれたとされています。

応神天皇の代の伝承には、蝦夷(えみし)の朝貢、吉野国櫛(くず)の貢献などのほか、朝鮮半島の百濟から王仁(和邇吉師)らが、論語十卷、千字文一卷を献上してきた。また手人韓鍛(てひとからかぬち)の卓素(たくそ)と呉服(くれはとり)の西素(さいそ)の二人を貢上してきたとの記述がある。

中国の『宋書』や『梁書』に見える倭の五王の讚に比定する説もあります。

●第8代・孝元天皇 劔池嶋上陵

石川池の横に位置する中山塚1～3号墳(円墳2基、前方後円墳1基)です。石川池は古墳の周濠ではありません。人工的に造られた灌漑用の溜池です。以前は劔池と呼ばれていた。

『古事記』孝元天皇記に御陵は劔池の中の岡の上にあるとしており、周濠ではなさそうです。

『日本書紀』応神天皇11年(280)10月に、劔池、軽池、鹿垣(かのかき)池、厩坂池を造るとあります。

陵墓が造られてから随分たつてこの溜池が造られたようである。

『日本書紀』にはさらに、皇極天皇3年(644)6月、大化改新の一年前に、劔池で一本の茎から二つの花を咲かせた珍しい蓮が見つかった、これは絶頂期にあった蘇我臣が栄えるという前兆だとし、大法興寺(飛鳥寺)の丈六の仏に献上したとある。その1年後に中大兄皇子らのクーデターで滅ぼされてしまった。

明治になって、劔池嶋上陵が現在の場所に治定されたとき、その丘の周囲の劔池も周濠として宮内庁の管轄に置かれた。ところが、明治29年(1896)に農業用水を確保するために地元で水利組合が結成され、劔池を拡張することになった。拡張工事は明治33年(1900)に完成したが、その際宮内庁管轄の劔池との境界を示すために、コンクリート製の杭が打ち込まれた。それが、池の水が減少する冬場に水面に顔をだす杭である。

●石川精舎跡(本明寺)

本明寺(ほんみょうじ)の正面の柱に小さな見えにくい説明板によると、「石川精舎、今本明寺と称す。敏達天皇十三年(584)、蘇我の馬子、百濟より貢するところの仏像を請い受け、己が石川の宅に於いてこれを安置す。仏法の初まりは茲より作れりという」とある。

石川精舎の候補地は、この本明寺以外にも、同町の大歳神社付近の西側ウラン坊遺跡(石川池北側)などがあり7世紀後半の古瓦が出土していますが、どれも確証のあるものではありません。

境内にある五輪塔は蘇我馬子の塔と伝えられ、高さ230cm、各部完備する鎌倉時代の立派な石塔である。

●厩坂寺跡

ここは興福寺の前身の寺跡である。

天武天皇元年(672)の壬申の乱に勝利し、飛鳥浄御原に都を開くと、興福寺の前々身である京都の山科寺からこの場所に移された。この場所が大和国高市郡厩坂だったため、厩坂寺と呼ばれた。

元明天皇が和銅3年3月の藤原京から平城京への遷都され平城遷都の実質の指導者であった藤原不比等が平城遷都と同時期に現在の興福寺の場所に移した。

京都教育大学の和田萃名誉教授は厩坂寺跡がこの地であるとしています。